

氏 名	ナシール ウッディン Nasir Uddin
学位(専攻分野)	博 士 (地域研究)
学 位 記 番 号	地 博 第 55 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	ア ジ ア ・ ア フ リ カ 地 域 研 究 研 究 科 東 南 ア ジ ア 地 域 研 究 専 攻
学 位 論 文 題 目	Homeless at Home : An Ethnographic Study on Marginality and Leadership among the Khumi in the Chittagong Hill Tracts of Bangladesh (バングラデシュ・チッタゴン丘陵地帯におけるクミの周縁性とリーダーシップに関する民族誌的研究)
論文調査委員	(主 査) 教 授 速 水 洋 子 准教授 安 藤 和 雄 准教授 石 川 登 准教授 田 辺 明 生

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、バングラデシュのチッタゴン丘陵地帯においてシナ・チベット語族、チン系の言語を母語とする、クミという民族の政治・社会的適応過程に関する民族誌的な研究である。

同地域は、常に多民族的状況にあって民族紛争の絶えない地域である。同地域の諸民族集団は、英国植民地期からパキスタン統治期、そして現在のバングラデシュ国家下にいたるまで国家の周縁に位置づけられ、ベンガル語でパハリと総称されてきた。丘陵地と低地の関係の歴史を通じて、国家政策への恭順と抵抗の過程で、一部のパハリ集団が特権化する一方で、クミを含む人口規模も小さい集団はさらに周縁化されてきた。そうした中で、本論ではクミの調査に基づいて、近年の社会経済的な変化を背景に、新しいクミの指導者層が生まれてきた過程を、在地の社会関係に埋め込まれた政治的権威との動態的な関係から記述・分析する。文献資料とともに、2005年11月から2007年4月の間に行った民族誌的フィールド調査による一次資料に基づく成果である。本論文における分析を通して、チッタゴン丘陵地帯の住民とバングラデシュ国家との相互関係の中で、クミのリーダーシップがどのように形成されているかという論文の主題に向けて、各章の内容は以下のとおりである。

第一章では、研究の枠組と目的を提示し、先行研究を検討し、調査地について、そして調査そのものについて特にチッタゴン丘陵の調査にかかわる諸問題とともに紹介している。

第二章では、チッタゴン丘陵地の地理的・生態的な特徴を概観し、パハリと総称される人々の社会・文化的特質について比較検討している。

第三章では、パハリと呼ばれる人々の周縁化が植民地期以来の歴史的過程の中で進行してきたことを検証する。植民地政策で特筆されるのは、間接統治の中で丘陵地の特定の民族集団がラジャを輩出し、1900年のチッタゴン丘陵地統治法により、同地域が保護の名のもとに他地域より隔離されていった過程である。これがその後の丘陵地と低地の関係、およびパハリ集団の内部の文化の布石となる。その後、パキスタン期を経て、現在、教育機会も多く特権化した一部のパハリ集団に対して、クミなどの少数者は二重に周縁化されてきたことを指摘する。

第四章では、近年のクミ居住地域におけるインフラ整備による市場や都市部へのアクセスと社会経済的な変化について明らかにし、その中でクミが教育機会を得、商品作物などによって市場経済に対応していることを描き、さらにクラマと呼ばれる新興の宗教運動が、従来の慣習を放棄し、禁欲的で合理的なより良い生活への改善を提唱していることで、彼らの日常を内から大きく変容させていることについても言及し、クミの人々がどのように変化に対応しているかを記述している。

第五章は、在地の社会関係において、親族・クラン組織のもつ重要性、そしてクランと婚姻関係がムラを超えたネットワ

ークを形成し、その中から親族ベース・非親族ベースの多重のリーダーシップが生じていることをクランの長老たち、そして宗教的な指導者らとともに、非親族も含む社会関係を基盤にして、日常的な相互扶助関係や、民族や共同体の規範に基づく説得力によって指導者と仰がれる例などを紹介している。

第六章では、これらの旧来の在地の権威から、ムラを超えた指導者がどのようにクミ全体の権威として認められるようになるか、また、それらのクミ内部の指導者とは別に、近年出現した、教育を受けた若手の、外へ向いクミの利害を代表して交渉にあたるリーダーについて論じている。また、そうした新興のリーダーたちの政治的言説にみられる、パハリの上層部や低地権力に向けたクミの自意識の表象を分析する。そして多重のリーダーシップの共存の動態を分析する。

第七章では、論文全体をまとめ、チッタゴン丘陵地におけるクミの周縁化とリーダーシップの共存の動態を分析する。

論文審査の結果の要旨

バングラデシュ東部のチッタゴン丘陵地には、チベット・ビルマ語族に属する多様な言語を母語とし、生業形態も、また文化・社会的様相も低地のベンガル系住民とは異なる諸民族が居住する。しかし、現地の政治・軍事的な情勢などにより、これまで同地域の調査は容易ではなかった。一般的にも、チャクマ、マルマ、トリブラなど、丘陵地にあつて人口規模が比較的大きい諸集団については言及があつても、さらに周縁に位置づけられてきた少数民族については、その実態に関する情報がなく、現地調査に基づく研究はほとんどされてこなかったのが実情である。本論文は、そうしたマイノリティのうちのチン・ルシャイ語系のクミ語を母語とする人々に焦点を当て、2005年11月から2007年4月の間に行ったフィールド調査に基づく成果である。

論文の目的は、植民地期以来の歴史的な展開から現在に至るまでの同地域の周縁化の過程と、政治経済的な変化の中で見られる在地のリーダーシップと、そこから生成しつつある新しいリーダーとの相互関係の動態を検証することである。その中で、本論文が明らかにするのは以下の論点である。

- 1) 植民地期以来の歴史的な展開の中で「チッタゴン丘陵地」は、1900年に制定されたチッタゴン丘陵地統治法のもとで比較的人口規模の大きなチャクマ、マルマ、トリブラ出身の首長（ラジャ）のもとで間接統治を受けた。植民地期以来、丘陵地をバングラデシュの他地域から隔離した保護政策が、バングラデシュ独立後には丘陵地の少数民族の周縁化とアイデンティティ形成、ベンガル人の移入政策と丘陵地への軍の侵攻へとつながったことを論じている。
- 2) そうした歴史的な背景にともない、バングラデシュ国内において上述のように周縁化されたチッタゴン丘陵地においても、ラジャを輩出してきた諸集団は教育機会も多く、丘陵地の指導者層を形成し、特権化されてきたが、それ以外のクミを含む諸集団はさらに周縁化されるという二重構造が見出されることを歴史過程の文献研究から分析している。これまでのチッタゴン丘陵地の諸民族についての一元的な理解の中で欠如してきた視点である。
- 3) 近年の交通網などのインフラ整備により、調査地のクミ住民も焼畑以外に常畑での商品作物生産という生業上での対応を開始し、市場を中心とするベンガル語世界へ進出する度合いが増している。その中で、新興の宗教実践や教育機会の普及により自らの生活改善を目指す在地の努力が見られることを指摘している。
- 4) 従来のクミにおける政治的権威は、一方で植民地期以来、行政の最末端に位置づけられる集落のリーダーであるカルバリや新興宗教のリーダー、父系クランの長老、儀礼的権威などを中心にしつつ、親族ベースとは別の原理による在地の規範に基づく日常的な相互扶助関係や説得力によって認められるリーダーも存在し、こうした社会関係を基盤に、平等な中であつて指導者層を形成してきたことを、豊富な事例によって明らかにしている。
- 5) このような集落レベルの指導者層の中から、共同体を超えたクラン組織や婚姻関係に基づくネットワークにおいて力を発揮し、クミという民族集団全体の慣習などを討議する場において権威をもつ人物がクミ全体のリーダーとなっている一方で、チッタゴン丘陵地の諸集団の間の交渉、そして低地国家権力との駆け引き、その両方においてクミの利害の代表者となる若手指導者が、在地の指導者層の次世代から育ちつつある。最後にこうした新興の指導者層と、在地の権威とが基本的に歩調を合わせた相互関係によって、クミが自らの周縁化に対抗し、政治的な声を得ていることを指摘している。

以上でのべたように本論文は、これまでほとんど行われることのなかった現地での長期滞在調査に基づき、チッタゴン丘

陵地における民族集団の周縁化の歴史過程と、現状における周縁化への対応と指導者の出現について、歴史資料と民族誌的記述を中心として明らかにしたものである。その民族誌的な価値とともに、周縁化されたマイノリティの政治的適応と主張の過程を明らかにしたもので、これまでほぼ皆無であった同地域の研究の開拓的な役割を担うものである。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成20年1月25日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。